第5章　平成2年度山口大学構内の立会調査

第1節　吉田構内の立会調査

1　大学会館前庭部環境整備に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　M－15

調査期間　平成3年2月18日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約2㎡

調査結果　工事は上下二段にわたって造成されている大学会館前庭部の下段部分に、暗渠用の排水管を埋設するものである。排水管本体の埋設に伴う掘削は、過去の試掘調査[1)]の結果、埋蔵文化財に直接影響がないと判断された。しかし、付随する排水桝の埋設地点二ヶ所については掘削深度がやや大きく、また、下段の北西部分が比較的遺構の分布密度が希薄であることなどから、工事規模を勘案して立会調査を実施した。

二地点とも現地表面から約20cm下位までは構内造成時の埋め土で、その下位には黒褐色粘質土が検出された。層厚は約40cmで、試掘調査時に検出した縄文時代から室町時代にかけての遺物が混在する遺物包含層と同一層と考えられるが、調査面積が狭小なため、遺物は出土しなかった。

また、遺物包含層の下位には黄褐色粘質土の地山が検出されたが、遺構は検出できなかった。

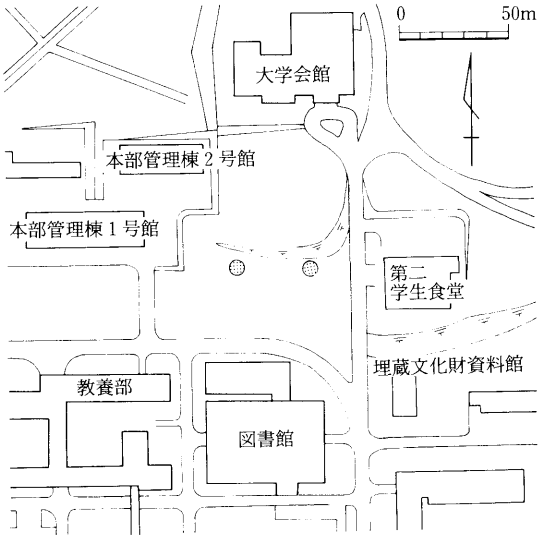

Fig.44　調査区位置図

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

2　第一学生食堂設備改修に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　Ｊ－19・20

調査期間　平成３年２月20日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約７㎡

調査結果　工事地域は弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡21棟が現地保存されている「遺跡保存地区」に近接しており、また、工事地域から教育学部校舎棟に至る地域では、河川跡あるいは溝の埋積土と考えられる黒褐色粘質土が検出されており、弥生時代中期の土器が出土している[1)]。

工事は第一学生食堂の設備改修に伴い、同敷地の北側に排水管を埋設するもので、その掘削規模は、東西に長さ約17.5m、幅約40cmの路線について、現地表面から約90cmであった。弥生時代中期の遺物を包含する黒褐色粘質土は、現地表面から約75cm下位で検出されいることから、工事によって同層が掘削されるおそれがあったため、工事規模を勘案して立会調査を実施した。

その結果、工事による掘削基底面まではすべて構内造成等に起因する埋め土で、顕著な遺物は確認できなかった。工事地域は既設の埋設管が東西方向に走行し、また、第一学生食堂にも隣接していることから、過去に遺物包含層、遺構が存在していたとしてもこれらの工事によってすでに消滅している可能性が高い。

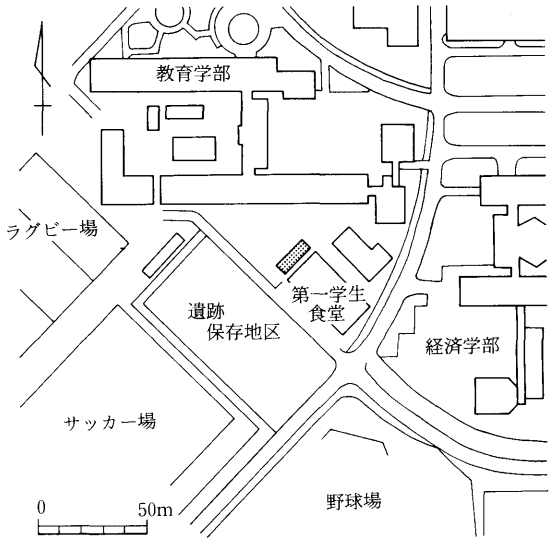

Fig.45　調査区位置図

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「山口銀行現金自動支払機設営に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、1987年)。

3　教育学部附属養護学校案内板設置に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　E－20

調査期間　平成3年3月18日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約1㎡

調査結果　案内板設置に伴う工事地点には、テニスコート北西隅二ヶ所、陸上競技場南西隅の計三ヶ所が選定された。前者は、テニスコートフェンス新営の際実施した調査の範囲内に設置されるため、今回の調査対象から除外した。しかし、後者については過去に調査事例がなく、また、附属養護学校敷地における試掘調査時に検出された、弥生時代から平安時代の遺物包含層[1)]の分布範囲内にあたることが予想されたため、工事規模を勘案して立会調査を実施した。

工事による掘削は現地表面から約1.8mであった。構内造成等に起因する埋め土は層厚約1.7mで、吉田構内の他の地域と比較して極めて厚い客土がなされている。この堆積土は工事地点に近接して、南東から北西に走行する側溝の工事に伴う撹乱の可能性が高い。埋め土の直下には、青灰色砂質粘土（5BG5/1）が堆積しており、湧水が激しい。地山と考えられるが、遺構は検出できなかった。

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属養護学校新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報IX』、1991年）。

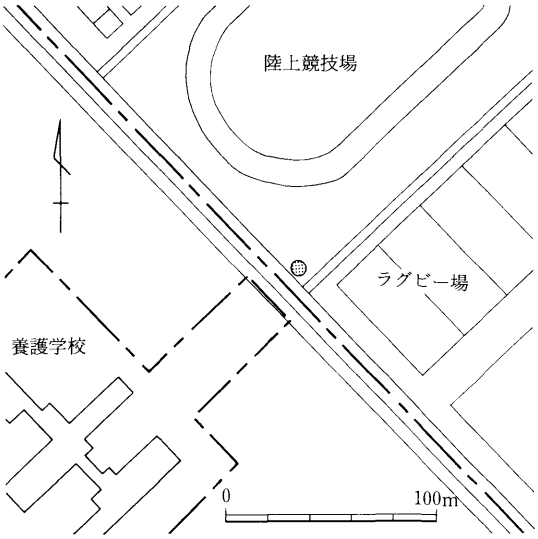

Fig.46　調査区位置図

PL. 34

吉田構内全景（北西から）